

2010年度 ティヤール・ド・シャルダン奨学金懸賞論文

安全・安心な社会の構築を目指して

ー研究者の視点からー

疎開保険を通じた

地域と都市間のセーフティネット構築に関する一考察

上智大学大学院 地球環境学研究科 地球環境学専攻

中根 太郎 (B0995075)

【要旨】

近代化の波は、人類に全世界での活動を許す反面、地域社会の関係に対する閉塞感を高め、都市への人口移動と都市型生活形態の広がり、関係性の希薄化をもたらした。

ティヤール・ド・シャルダンは、このような混沌たる社会現況にありながらも、むしろ今や現代社会は発展の最中にあると指摘する。現在進行中の自己持続的、個人集中的である超人化の動きを消極的に捉えることは無益であり、それに反して、超人たる自己の収斂化の過程によって「精神圏」の成長が必然的であるとする。これはより網羅的、多元的、かつ調和的な一体化を追求するという意味である。事実、人と地域との関わり方の希薄化が進んだ一方で、自由時間の増加と余暇志向の高まりを背景に、個人がそれぞれの意志に応じて、新たなつながりを志向したり、安心感を得ようとしたりする動きもある。

筆者の研究は金融や保険の手法を取り入れた衰退した地域の活性化を大きなテーマとしている。今回は、そのような新たなつながりを志向する流れのなかで、地域社会に多く残存している資源を有効活用しながら解決策を検討した。都市住民のために安心・安全な場を提供するという「疎開」に着目し、都市部における災害やストレスフルな生活から難を避ける際の行き場がないという課題に対して、都市と地域とが意志のある金銭的協定を結び、新しいつながりとしてのセーフティネットの構築を試みる事例がある。

事例は、金融の機能を通じて、都市住民は「意志」のあるお金で行き場を確保し、一方で、疎開先として地域社会は独自の「知恵」をもって保険をひとつのコミュニケーションツールとして見出し、地域活性化の糸口を模索するという新しい社会関係性の構築を目指している。これを社会組織化の方向で捉えようとしたティヤールの視座に即して考えると、都市と農村地域が新しいつながりを追求する目的を共有できる保険の構造を鑑みれば、彼の望む人類の未来へ向かっての一つの集合化を試み新しい局面への過程にある現象として、注目に値する。

【緒言】ⁱ

近代化の歩みの中で、科学技術の著しい発展は、我々人類の生活を豊かにすることに寄与した反面、物質的充足が必ずしも幸福をもたらさず、地球環境問題をはじめとする負の影響も及ぼしている。さらに近代化の波は、人類に地域だけでなく全世界での活動を許す反面、伝統的な地域社会の関係に対する閉塞感を高め、都市への人口移動と都市型生活形態の広がりによって、個人と地域の関係性の希薄化をもたらした。個々人が利己な活動に陥る傾向に、人間が粒子のごとく分離した孤独の状態に苛まれている。

もともと、都市部は人が集中的に居住し、孤独感を覚える人は存在にくいと考えられてきた。しかし、現在では都市部における人的交流が限定的である傾向が把握されており、生活に不安感の増殖、精神的な疾患の蔓延、また場合によっては、誰にも看取られずに高齢者が孤独死に至るなどケースの増大など、社会的問題として取り上げられるようになってきている。

明治以降、近代の日本は欧米を目標に急速に近代化を遂げてきた。日本人の不安の根源は、この近代化の過程と関係があるとも言われている。都市化が進み、流動的に変化する人間関係や、社会状況に自らを適応させながら暮らしている。幼少時より互いの面識のある集落やむらといった単位での限定的な社会とでは適応の容易さに大きな違いがある。このような小さな社会は、人間の関係性を培う場として、孤独の追放を果たす役割を担ってきた。しかしながら、もちつもたれつの互助、援助が、いつしか忘れ去られるとともに、人と人の絆が頼りなくなってしまった。現代社会は「東京沙漠」の言葉に体现されるように都市社会は豊かな生活を送れるものと思われるが、隣近所との付き合いが形骸化するだけでなく、友人や家族、親子という間関係も冷却化の一途を辿っているようにもみえる。

このような現代人に特徴的な孤独や不安感の解消をいかに講じてゆくべきなのか。この問いに答えるために、人類の未来像を超人間として捉え、社会的組織化の方向で論じているティヤール・ド・シャルダンの視座に糸口を見出すこととし、ティヤールの生き様や彼の遺した名編から視座を掬い取り、筆者の研究にどのような示唆を与え得るのかについてまとめてみたい。

【本論】

1. ティヤールの視座ⁱⁱ

1-1. 精神圏の形成と現代人の不安の根源

ティヤール・ド・シャルダンとは、生命の出現により生物圏が形成されたのち、人間の出現とともに魂が見出されるとともに思考力の皮膜である精神圏が形成され、その精神圏の発達のなかにエネルギーの開花に向かう人間の進化軸があると考えた。その進化の過程は、現時点で、明らかに前代未聞の臨界状態に辿りついており、変異を要求されていることに端を発した実存的不安に現代人は苛まれているとした。文明の開花の最中にある時期に、

人類は、その文明が確立されたことに耽溺し、自己満足的、自己中心的な趣向に傾斜してしまっただけである。我々現代人の不安の根源は、そのような個人の殻に閉じ込められた環境の中でめまいや方向感覚の喪失に襲われた結果、新しい展望になじめず、それにおいていることにあるとし、偉大な力が明確な方向と目的を与えない限り、未来はないと主張した。我々は、いずれ訪れるかもしれない予期せぬ出来事に漠然とした不安や焦りを抱くものの、そのような念を解消するに及ばず、意識を背けるようになっている。

1-2. 統一的完成を目指す精神圏の成長

テイヤールはこのような絶望的変事の予兆を窺う段階にありながら、むしろ今や現代社会は発展の最中にあると指摘する。その変事へと向かう傾向は、我々の私的な利用に都合なように統制することもままならず、一体化という抗しがたい過程にそって、継続的な模索の方向にむかってその歩みを確実に進んでいくことを説いている。現在進行の最中にある自己持続的、個人集中的である超人化の動きを消極的に捉えることは無益であり、それに反して、超人たる自己の収斂化の過程による精神圏の成長が必然的に現れると信じて疑わなかった。

そこでテイヤールは聖書に示された一つの創造物という考え方に深く共感し、未来の方向を見出す答えは、地球全体にあるとも言っている。彼は、「滅びることを望まないのであれば、今こそ私たちは古い偏見を捨て去り、地球を形づくらねばならない」、また、「科学的に世界を見つめれば見つめるほど、生命は一つにつながっているという意識を積極的に持つ以外に、生き物の未来はあり得ないように思われてくる」とし、地球全体が新たな発展に至る重大な分岐点にある状態を示して、これを「惑星化」と呼んだ。つまり、人類は各個人（の人格）が相互に関係し合って、超個人的な統一的意識とスケールの大きな精神圏を希求することで未来は開かれると主張したのである。

人間社会というのはまさに複雑であり、個々が合理的に行動しても、全体として合理的行動にならない相克をもたらす状況がみられる。そこで、集団を構成する個々が自律化を成し遂げたあとの相互作用の結果、集団が生産と経済の発達の中で交換関係と依存関係を強めつつ、何らかの行動をすることによって、社会全体として調和のとれた精神的空間を作り上げる。その空間は、技術の発達とともに急速に国際化されつつあり、いまや我々人間の生活を養う母体は地球全体までに膨張するに至った状況をテイヤールは「惑星化」と名づけたのである。このように、テイヤールは、人類の未来をあくまで各個人を尊重しながらも社会的組織化の方向で視座を置いているものと考えられる。

ここまでは、テイヤールの業績から、新たな社会の形成への転換を促す文脈を提示したわけだが、筆者の研究を考えるにあたって、個人が一つにつながっているという統一的意識の希求と、融和を伴う一体感の醸成は、地域と都市との連携によるセーフティネットの構築に最も重要な要素であると言えそうである。

このようにテイヤールの唱えた、「各個人の意識を尊重しながら、調和的な一体化を追求するという社会的組織化の方向での精神的革新」は、同意や協力、そして周囲を変える意志のある協力が必要となると考えられる。以下では、自身の研究の文脈における社会的組織化の方向での同意や協力、周囲を変える意志というものに留意しながら、研究対象の概要について詳述することとしたい。

2. 自身の研究ⁱⁱⁱ

2-1. 「意志あるお金」を通じた新しい社会関係性の構築

筆者の研究は金融や保険の手法を取り入れた農村地域の活性化である。農村地域の資源を有効的に活用し、都市住民のために安心・安全な場を提供するという「疎開」という都市部における災害やストレスフルな生活から難を避ける際に、当事者が行き場に困るという状況を負った場合を想定し、都市住民が地域と意志のある金銭的協定を結び、不安の払拭を図ろうというものである。

今日の地域社会の実情、また、グローバル社会の広がり、さらには、地域との信頼関係が一体となった地縁社会の危機的状況を踏まえると、新たな時代に応じた「意志」とその「意志」を反映させた上での制度設計に対する「知恵」が欠かせない。この「疎開パック」は、金融の機能を織り交ぜながら、意志のあるお金や意思のある人々の知恵を仲介させ、社会を安心・安全な方向に流していく一手段としての価値が見出されるのである。その価値をどのように高めることができるのか。以下は、他の事例などを参考に「疎開パック」の概要について説明を加える。

念頭に置くべき視点としては、都市と地域（農村）のこれまでに新しい関係性をいかに構築するかにある。その核となるのは、都市と農村の双方の繋がりを一過性のものとし、ないを通じた安定的かつ強固な関係を醸成することに寄与するであろう保険のメカニズムを活用である。以下では、「震災保険パッケージ」と呼ばれる早稲田商店街での先駆的事例の紹介と、「疎開パック」という新しい保険をもって地域振興を図ろうとしている山陰地方のとある町の取り組みに的を絞って論を展開していきたい。

2-2. 疎開保険とは—早稲田商店街発の先駆的事例—

「疎開保険」は、一般的に「震災疎開パッケージ」とも呼ばれている。地震や津波などの予測される震災害に対して、事業主体者が予め疎開先を用意し、それを住民に販売するというものである。

かつて京都や堺には、「まち衆」と呼ばれる自治集団が存在していた。資金力を背景に、町を自分たちで治めた商人達がその主体であった。近代化を遂げた現在の地域社会においても、行政に頼らずまちづくりに取り組む人々がいる。阪神大震災では、一瞬にして地域コミュニティが壊滅的被害を被った。その教訓から、防災の視点をまちづくりに生かそうと模索をした結果、生まれたのがこの震災疎開パッケージである。

この震災疎開パッケージは、2002年に東京の早稲田商店会が開発し、運営元の事務局である全国商店街震災対策連絡協議会が立ち上げ、他の商店街にも働きかけて売り出したものである。売り出すパッケージは「震災あんぜんパック」の名で年間一人5,000円（小学生以下は3,000円）という値段が設定され、一般住民が任意で保険料を支払う。保証期間の1年間に地震や津波、風水害など激甚指定を受ける大災害が発生した際に最高30万円の疎開費用（滞在費、交通費）が支給され、提携した受け入れ地域に疎開できるという仕組みである。商店会は、震災時、住民の安否を確認して親族に伝えるという役目も負っている。また、仮に一年間に震災が発生しなかった場合は、翌年分を購入して更新すれば無事戻しとして、疎開先から約3000円分の地方特産品が住民に届けられるというものである。

実質2000円の掛け捨てで疎開先が保証されるというこのパッケージの生みの親は、早稲田商店会会長の安井潤一郎氏である。6,432人もの犠牲者を出した阪神大震災は震災後、災害復興住宅での孤独死の犠牲者も100名以上いると言われ、現在も心的外傷後ストレス障害（PTSD）をはじめとする精神的ショックから立ち直れずにいる人も多く存在する。安井氏は、震災直後、早稲田から連日多くの学生達がボランティアに赴いたが、帰ってきた彼らから行き場を失った高齢者の人達の悲惨な心境を耳にして大きな衝撃を受け、この地方との相互疎開提携の試みを開始したという。

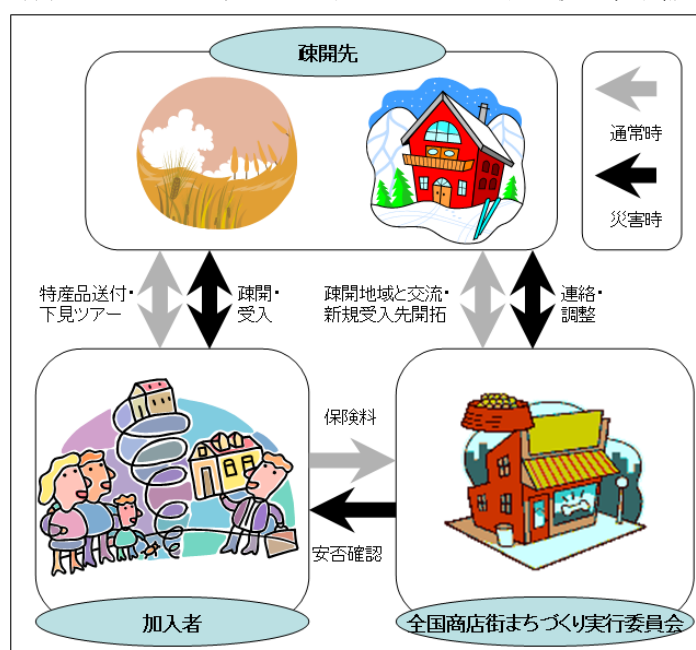


図 「震災あんぜんパック」のしくみ

商店街は、この震災あんぜんパックを購入した住民とともに、疎開先を訪ねて回る下見ツアーを実施するなどして、交流を深めている。ツアーを通じてお互いの面識を深め、疎開が現実となった場合に、被災者を受け入れる上での良好な関係をつくり、安心感を得る機会となっている。震災への備えに加え、見知らぬ地域との絆ができることを住民側は魅力に感じる事ができるという。

現在は、特定非営利活動法人全国商店街まちづくり実行委員会事務局が運営している。商店街組織をベースにした疎開受入先は、すでに20回以上の下見ツアーを実施している福島県福島市をはじめ、山形県大石田町・上山市・東根市、神奈川県相模原市、長野県飯山市、新潟県魚沼市、愛知県春日井市などがある。これらの地域は温泉施設や滞在先を用意し、いつ来るか想定のない天災の発生時における加入者の受入に備えている。

パッケージを拡販し、加入者を増やす目的で、参加を呼びかけた全国ネットワークが全

国の商店街による震災に備えたネットワークが活躍したこともあった。2004年に発生した新潟県中越地震時の被災者支援では、避難所に暮らす高齢者らを戸狩温泉も飯山市商店街にある旅館や民宿に送迎する一時疎開を実施することができた。宿には各地の商店街が食べ物や生活必需品を送って後方支援するなど、行政対応の限界を補う新たな復興支援策として注目された。

商店街にとっても、無事戻して送られる特産品で好印象が与えられれば、恒常的なリピーター創出につながり、手数料等の収入が入り活性化につながる。また、温泉地をはじめとする宿泊地も下見ツアーを通じてファンを作り出すことができれば活況を取り戻すきっかけとなる。このように、この震災疎開パッケージは、都市住民が地域と意志のある金銭的協定を結び、予期できない災害発生時の不安の払拭を図るとともに、疎開地域は、交流や特産物の贈呈を通じて地域活性化につなげるという妙策として、一定の評価ができる。

2-3. 疎開パックとは—自治体初の先進的取り組み—

鳥取県智頭町は、鳥取市から30kmほど中国山脈を分け入った山間地に位置し町全体の94%が森林で覆われている自然豊かな町である。江戸時代から伝統的な育林技術と恵まれた気候条件のもとで歴史ある林業地として栄え、智頭杉は吉野杉や秋田杉とともに現在でもブランド杉として名高い。また、かつては智頭宿を中心とした宿場町として栄え、中心部は今でも往時を色濃く残した鄙びた町並み景観を残しており、智頭街道商店街を中心とした観光に注力している。

全国各地の農村地域の例に漏れず、智頭町も深刻な過疎化と基幹産業である林業の衰退に悩んでいる。そこで、住民の意志と知恵を引き出し、消極要素をあえて逆手にとり、過疎地の活性化を試みようとしている。豊かな森林との共存を図り、都市住民へ安らぎの場を提供するという意味合いの込められた町のキャッチフレーズは「みどりの風が吹く疎開のまち」であり、これはまちづくりのコンセプトでもある。

その智頭町は、コンセプトに則り、2011年4月から、前述の震災疎開パッケージに倣い、「疎開パック智頭町」の取り組みを開始することを表明した。実施すれば自治体が主体となって取り組む全国初の疎開保険の事例となるといわれている。

この疎開パックの掛金は、一人年間10,500円で設定され、無災害時には、必要経費を差し引いた5,000円相当を町で収穫された米や特産品を配当として、還付するものである。保険金の上限は30万円を見込んでおり、保険加入者に対して約1週間分の食事と滞在費を保証する。町によると、京阪神を中心とした都市圏の住民に加入を呼びかけるとしており、町出身者や企業などにも協力を求め、趣旨に賛同した約1,000人の加入者を見込んでいる。

この保険の適用は、現状では災害救助法が発令される地震や噴火、津波のみに限られているが、将来的には、都市住民に特に多いといわれる精神的疲労に苦しんでいる憔悴した人々にいわば疎開治療といえるようなメンタルヘルスを施せるパッケージにまで発展させ

たいとしている。ストレス社会に翻弄され、息の詰まりそうな日々を追われる人々が、逃避できる場所としての「疎開のまち」を智頭町が標榜しているからである。この都会人向けの新保険は、そのような意味合いでの広がりの可能性も秘めている。

しかしながら、震災害以外にこのような精神療法の場として、患者を受け入れることは、民泊をベースにしている智頭の場合、受け入れる家庭への不安感も強い。医療体制の整備や精神的ストレスに悩まされている都市住民への配慮をいかに講じてゆくのかは、今後の重点的課題でもある。

それでも、この疎開パックを有効に活用しながら町外の多くの人々とこの価値観を共有したいと考える町は、豊富な森林資源を元手に、その効用をまちづくりの原動力としながら、森の空間と人のつながりを培う「森のようちえん」や「森林セラピー」の取り組みとあわせて新たな付加価値創出を模索している。本来の目的は、「疎開」を切り口にした町の活性化であり、保険をきっかけとした下見ツアーや農業体験、森林セラピー体験などの着地型の交流を深めて観光を促進させ、都市住民の定住をも増やしていきたいとしている。

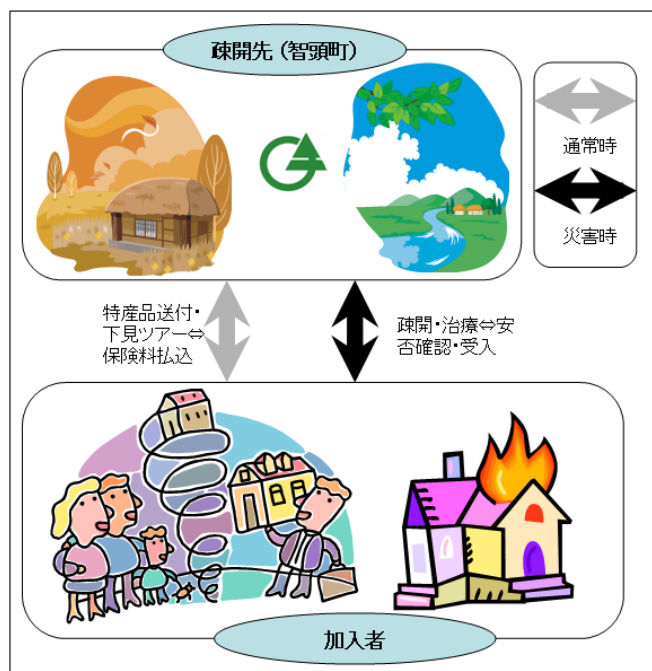


図 「疎開パック 智頭町」の仕組み

この疎開パックと呼ばれる新しい保険を通じたつながりをもとに、都市住民は、「意志」のあるお金で行き場を確保する。一方、疎開先としての智頭町は「知恵」を絞り、自治体レベルでは画期的ともいえるこの保険をひとつのコミュニケーションツールとして地域活性化の糸口を見出す。

3.まとめと今後の課題

このように、疎開保険は、地域の資源を有効的に活用し、都市住民のために安心・安全な場を提供するという疎開に着目しながら、都市部における災害やストレスフルな生活から難を避ける際の行き場がないという課題に対して、都市と地域とが意志のある金銭的協定を結び、新しいつながりとしてのセーフティネットの構築を試みているのである。

本稿執筆現在においては、未だ智頭町の疎開パック自体が検討段階にあり、仕組み自体を評価できる段階にはなく、報道されている資料を基に事例を紹介するに留めた。今後の課題は、現地に赴いての町の関係者へのヒアリングやフィールドワークによって見えてくるであろう事柄をさらに突き詰め、課題と現状をより鮮明に提示しながら、金融のノウハ

ウを通じた地域と都市との新しい関係性構築に関する考察を深めることである。

【結語】 iv

以上、震災時に備えとして安全・安心な関係性構築を図るという疎開保険の 2 つの事例を取り上げた。どちらの事例も真の狙いは、震災害を切り口とした社会組織化である。震災が起きないことが大前提であり、この保険には、安心な生活を支える上でのネットワークを築くという都市社会から要請と、衰退化の一途にある地域あるいは商店街の活性化につなげたいという地域の願いが込められている。

これら取り組みは、行政に依存しない社会保障制度と言える。この社会保障は、社会契約へと変貌を遂げようである。個々の一般市民も一人ひとりが可能な範囲内で行き場を見出すという社会契約の理念が背後にあると考えられるからである。グローバル化が進み、個人が粒子のごとく分離しそうな今日のなかで、どのように安全・安心な社会を目指すことができるのか。疲弊、衰退、荒廃といった消極的な段階から都市住民と地域社会の双方が相互互惠関係をもってつながる事例に、これからの安心・安全な社会構築の鍵が秘められているように考えた。

ところで、テイヤール自身の生き立ちを見ると、彼の前には、常に新しい戦場の荒涼とした風景が広がり、その中で戦禍を免れながら、時には軟禁状態にありながら、粘り強く研究を続けた姿が見て取れる。彼は、そのような環境に身を置きながら、人間や機械の狂奔にもかかわらず黙々と存在している自然に情愛を見出し、「人間たちから遠く離れ、その努力から遠く離れ、わたしを揺りなだめ、あまりにも緊張した活動を絶えず無限にやわらげてくれる世界をふたたび見出したい」とも綴っている。

近代化を突き進むなかで問題となる孤独や不安を完全に払拭することは、出口の見えない人類に課された宿命であるかもしれない。しかし、テイヤールは、不安に苛まれた現代人とその社会現況のなかにありながら、超人化の動きによって個々人が超人たる自己の収斂化の過程を辿ることによって精神圏の成長が必然的であるとした。これを社会組織化の方向で議論を展開しようとした彼の視座に即して、都市と農村地域が新しいつながりを追求する目的を共有できる疎開保険の構造を鑑みたとき、彼の望む人類の未来へ向かっての一つの集合化を試み新しい局面への過程にある現象として認められないはしないだろうか。今日、私を含めた都市に集中して暮らす住民が、金銭的協定というきっかけではあるが、原初的本質を内包した地域社会や自然環境に安全・安心を求めることは、上述したようなテイヤールの見地に少なからずとも通じていると思えてならないのである。

参考文献

- i 藤井 良広『金融 NPO—新しいお金の流れをつくる』岩波書店.2007.
- ii テイヤール・ド・シャルダン『自然における人間の位置 人間のエネルギー』日高敏隆・高橋三義 訳.みすず書房.1970.
クロード・キュエノ『ある未来の座標、テイヤール・ド・シャルダン』周郷博・伊藤晃 訳.春秋社.1970.
同志社大学—神教学際研究センター国際ワークショップ報告『宗教における戦争と暴力：一神教世界からの応答』.2004.
- iii 「まち衆 震災対策「お上頼らぬ」心意気（防災力）」朝日新聞.2002年1月17日（朝刊）
「コミュニティー——震災、備えあれば交流広がる、各地の商店街が疎開先仲介」日本経済新聞.2004年8月25日（夕刊）.
「コミュニティー——新潟中越地震の被災者支援、商店街ネット活躍」日本経済新聞.2004年11月11日（夕刊）.
特定非営利活動法人全国商店街まちづくり実行委員会「震災あんぜんパック」
<http://m-shoutengai.com/shinsai/>（2010年10月14日閲覧）.
「自治体初『疎開パック』智頭町が検討」日本海新聞.2010年9月14日（朝刊）.
「被災時はわが町へ 智頭町、都会人向け新保険 自治体で全国初導入」朝日新聞.2010年10月13日（朝刊）.
- iv 山崎 庸一郎『テイヤール・ド・シャルダン—未来への問いかけ』講談社.1971.